

夜會

晝 利休居士の時代までは二食なり、巳の刻頃を晝飯といひ、晡時を夕飯といふ、夫故晝の茶の湯といへば、巳の刻時分をいふ、當時一日に三食なるゆへ、晝の茶といふは、午時のごとくなりぬ、

〔茶道筌蹄一〕茶會

夜咄 むかしは晡時より露地入せし故、中立に露地小坐敷とも火を入れる也、晝、夜咄とも、いにしへの事にて、當時は夜咄も暮六ツ時に露地入する也、但し客入込で、炭をせず、前茶點じ、跡にて炭をいたし、水を張、食事出す事、

〔茶道早合點下〕茶の湯の大概

夜咄と云は、酉の刻なり、夜會とは云す、

〔茶道便蒙抄四〕夜咄之事

一 主客ともに隙入無之時を申合て、互に緩々とはなしあかさんと心得て呼よばる、なり、萬事其心得あるべし、客の入來は、酉の刻に案内乞べし、

〔臺子まきまやうの時かざり様の事〕夜會の様子

一夜のすきは晝より大事の物なり、まづ心まづかに、手前もさはがしくなきやうにまなす事せんなり、庭には石どうろに火をともし、路地には水うつべからず、あつき時分ならば、うへ木ばかりに打てよし、

一 こしかけにはあんどん置なり、置所はこしかけの前のはづれに、すみかけて置なり、

一朝にても夜會にても、石どうろに火をともしては、まやうじを立る物なり、ともし火には、あぶらたくさんに置なり、客にあかせぬ道理をせり、

一 すきやの内には、たんけいをとぼす事本なり、置所はゆるりぶちより、たゝみ廿三め、但かねにては壹尺五分あり、中程の地、まきいよりは一寸、但二目半なり、火口はにじり上りへむけて置なり、客入てすみする時は、たんけいをゆるりのふちぎわまでよせるなり、すみもたくさんに置事